

『清明』 杜牧

晩唐第一の詩人

杜牧は貞元九年（八〇三）～大中六年（八五二）の晩唐の人である。享年五十歳であった。我が国では平安時代の初めに当たる。八〇五年、最澄が唐から帰り、天台宗を開いた。八〇六年、空海が唐から帰り、真言宗を開いた。八五八年、藤原良房が摂政となった頃である。字は牧之、号は樊川。京兆万年、現代の陝西省西安市で生まれた。太和二年（八二八）進士に合格、更に上級試験の賢良方正科にも合格した。弘文館書郎（弘文館は皇族・上級貴族子弟を担当する図書館兼学校）をふり出しに、京官や地方官を歴任した。

肉親の情に深い杜牧

杜牧は非常に肉親の情が深かった。杜牧が三十五歳の時、弟杜顥も役人だったが眼病にかかり失明し退官した。杜牧は弟の眼の医療費や、弟一家の生活費等のめんどろをみた。宣州に殿中侍御史内供奉（檢察担当）として赴く時には弟一家をひきつれて行った。それまで杜牧が三十歳すぎたばかりの頃は、美男子であり遊び好きで、夜毎青楼に通ったという。

杜牧はよく出来るエリート官僚で、長安の都で又地方でと役人を歴任したので、俸禄についてよく解っていた。弟の医療費等の出費がかさむため、京官に比べて俸禄のよい地方官を望んだが、杜牧の希望通りには行かなかった。京官だった又地方官だったしたのである。四十四歳池州の刺史（州の長官、知事格）の時、「春末池州の小亭に遊ぶを題す」の詩を賦し、その中で「齊安自り移りて秋浦の守たり使君四十四、兩佩左鋼魚」私は黃州と池州と二度までも刺史に就任することが出来た。（つまり地方官だったので弟一家のめんどろをよくみれた）と杜牧の感慨を詠んでいる。左鋼魚とは、新任の刺史であることを証明する銅製の魚符（魚形の割符）。左側を腰に下げて持ち参し、州の府庫に保管する右側と照合して、身分を証明したものの。齊安とは黃州の郡名、秋浦は池州の治所、すなわち役所の所在地。



八四八年、杜牧四十八歳の時都に戻り、司勳員外郎史館修撰（尚書省の郎中の補佐役・人事を担当）となったが、やはり弟一家を抱えた大所帯で経済的に大変だったため、宰相に対して地方官への転任を願い出た。杜牧はまず錢塘（杭州）の刺史を願い出て許されず、次は湖州刺史への就任を希望して許された。

約一年後、考功郎中、知制誥に任命され、長安に戻った。この年弟が亡くなった。その折次の様な墓誌銘を杜牧は残している。「唐故淮南支使・試大理評事・兼監察御史、杜君墓誌銘」唐朝においても淮南（詩文などを書く）・試大理評事につき、監察御史をも兼ねたということで、弟の役人だった証明をしている。大中六年二月八日、実（京兆府）万年県洪原郷少陵の西南二里の先塋（先祖の墓）に帰葬した。（植木久行著「詩人たちの生と死」研文出版）弟が失明してからずっと医療費そして弟一家のめんどろをみた心やさしい兄だった。

春雨けむるその向うに淡い杏の花が

清明時節雨紛紛 清明の時節雨紛紛
路上行人欲斷魂 路上の行人魂を斷たんと欲す
借問酒家何處在 借問す酒家は何れの處にか在る
牧童遙指杏花村 牧童遙かに指さす杏花の村

清明とは、季節を示す二十四節氣の一つ、春分から十五日目をいう。陰曆の三月、陽曆の四月五日ごろである。

春の清明の時節だというのに小ぬか雨が降り続けている。この雨は道ゆく旅人であるわたしの心を、すっかり落ち込ませてしまう。

「ちよつと尋ねたいのだが酒を売る店はどちらの方かな」と牛飼いの少年に尋ねると、はるかかなたを指さした。眼をやるとブーツと淡い杏の花咲く村がみえる。

この詩を詠んだのは、前述の池州の刺史を勤めていた杜牧が四十四歳（四十二、三歳という説もある）の時役人としての充実感と弟一家のめんどろも十分にみることが出来、幸せを感じていた頃である。

鑑賞

桜美林大学名誉教授・二松学舎の元学長で同じく名誉教授の、本会顧問である石川忠久先生が「漢詩鑑賞辞典」（講談社）で、「杜牧の詩は軽妙洒脱が持ち味である、センスがよい、盛唐から中唐へと洗練されてきた詩の、美しさ、うまさの感覚が、風流な貴公子、杜牧の才をまって花開いた。」と記されていて「清明」は正にそのとおりである。この詩の起承句は霧の様に降る雨で、あたり一面がけむってしまつて道ゆく旅人（私）も心がすっかり落ちこんでしまった。転結句、そこへ牛を追いながらやってきた少年に

出会い、「酒屋はどちらの方かな」と尋ねた。少年は黙って向こうの村を指さした。雨のけむる向こうにボーツと杏の花らしき景が見えた。その



黙って向こうの村を指した

景のほんのりとした明るさに身も心も暖かさを感じてきた。この詩の前半が小雨で陰影であり、最後の杏の花が、ほのぼのとした暖かさがある。

この花は濃い色ではなく淡い色の花であろう。（白い花、と解釈している本、淡い色の花としている等まちまちであるが、いずれにしても桃の花のように濃い色ではなくボーツとした暖かさの感じられる色である）この詩は作者の気持ちの変化がはっきり表現され読む者も作者の気持ちと一緒になる。

起承句は気候のよい清明節。杜牧は太陽の暖かな日差しの中、農作業に励む農夫の姿を見ながら、野の花が咲き乱れる小道を歩んで、楽しみながら旅をしたいと思っていたのに、春雨のけむる日になり、私の心をすっかり滅入らせてしまった。と、いわば心の地獄を述べている。こんな気持ちをつらわそうと酒でも、と思い転結句で牛飼いの少年に出会い「酒屋はどちらの方かな」と尋ねるのである。貧

しい素朴なまだあどけなさの残る少年であろう、ここで出会った相手が大人ではなく少年であるから、この詩のよさが倍增する。

杜牧はいまでいう知事格の刺史であったのだから、大人なら地にひれ伏すかもしれないが、この少年にその様な身分の上下は分からず、また杜牧もプライベートルな旅でそれを喜んでいたことだろう。少年に遙か遠くの杏の花咲く村を指さされ、その辺りの様子に今までとうって変わって、心は天国になったのである。

この詩は何と言っても結句の「牧童遙かに指さす杏花の村」が味わい処である

晩唐第一の詩人と言われる杜牧の名句である。

読む者にはその光景がまさに絵の様にくっきり頭にうかぶのである。

ベトナムのホー・チーミンは中国で投獄中に自分の思い



「酒屋はどちらの方かな」

を杜牧の「清明」の詩を借りて述べた。

清明の時節雨紛紛

籠里の囚人魂を絶たんと欲す

借問す自由は何れの處に有るやと

衛兵遙かに指さす 舜公門